

「アメリカ南部の綿プランテーション と黒人奴隷」

小 川 晃

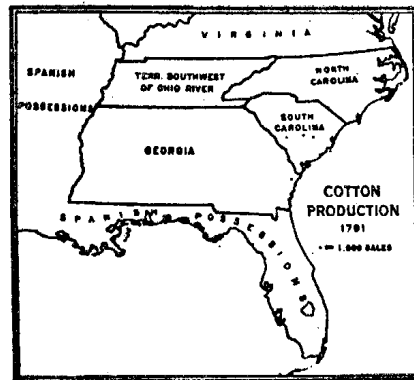
—

ウイルクス家自慢の豪華なテーブル掛けをかけたピクニック用の長い組立てテーブルが、いちばん日かげをえらんで、いくつもあり、その両側には、背に寄りかかれられないような腰かけがならべてある。……ウイルクス氏の園遊会では、いつも少くとも一ダースほどの黒人奴隷が、来客にお給仕するために、盆をもって忙しそうにあちこち働いていた。……丘をのぼると、よく均整のとれた白い建物が目の前にあらわれた。高い円柱、ひろびろとしたベランダ、ひらたい屋根、それはあたかも、自分の魅力に大きな自信をもち、そのためすべての人に対して寛容で親切でありうる貴婦人のように美しかった……と書かれてあるのは「風とともに去りぬ」Gone with the wind 1936. の一節である。これは南北戦争前のアメリカ南部の農村を描いているもので、棉花の栽培から棉花王国への象徴の時期でもある。また棉花栽培とその労働力としての黒人奴隷は切りはなすことなどできない事実である。綿作プランテーション plantation とそこに働く黒人奴隷の実状を中心に一つの考察を試みたのである。

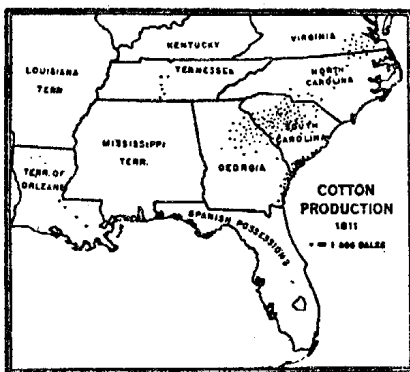
—

ヴァージニアを中心とした古い南部地方で煙草の栽培がゆきづまりを示しはじめたとき、アパラチャ山脈をこえ

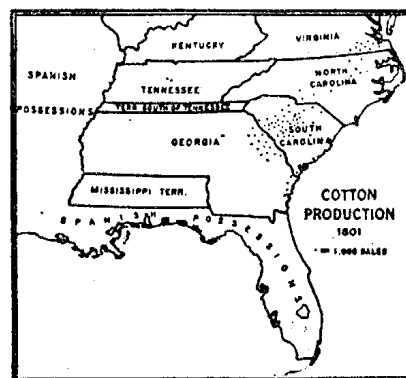
て、アラバマ、テネシー、ケンタッキー、ルイジアナ、ミシシッピーなどえ棉花の栽培が非常な勢いで拡大していったのである。



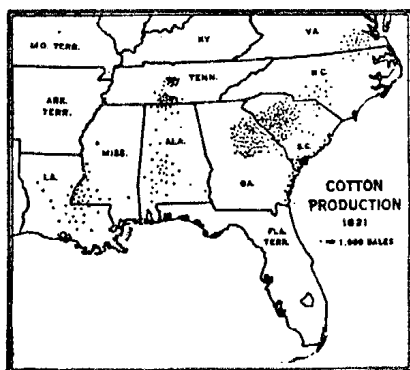
1791



1811

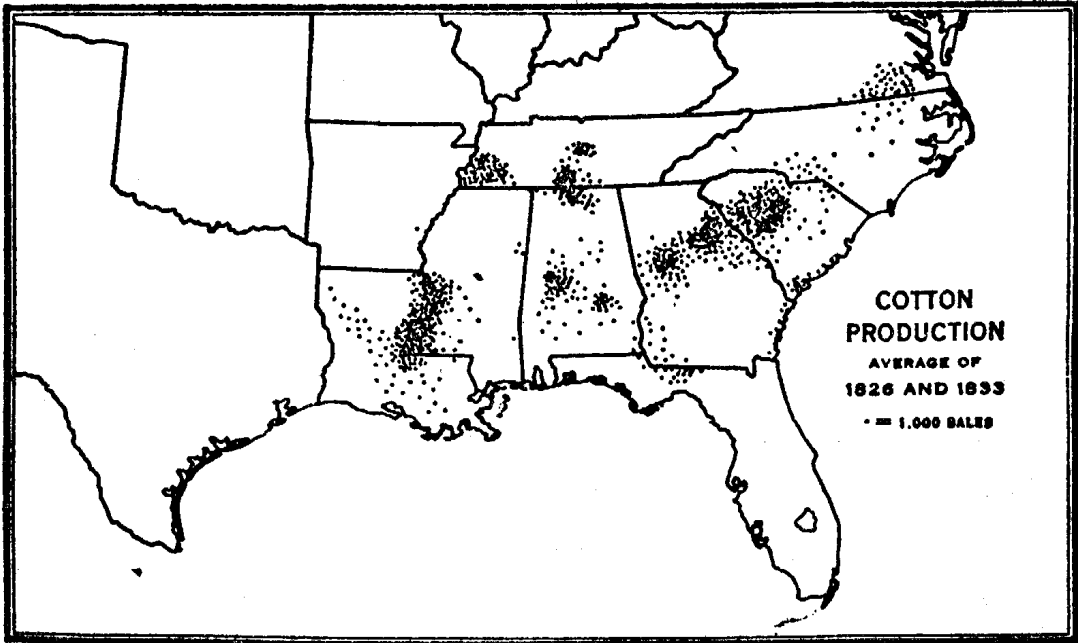


1801

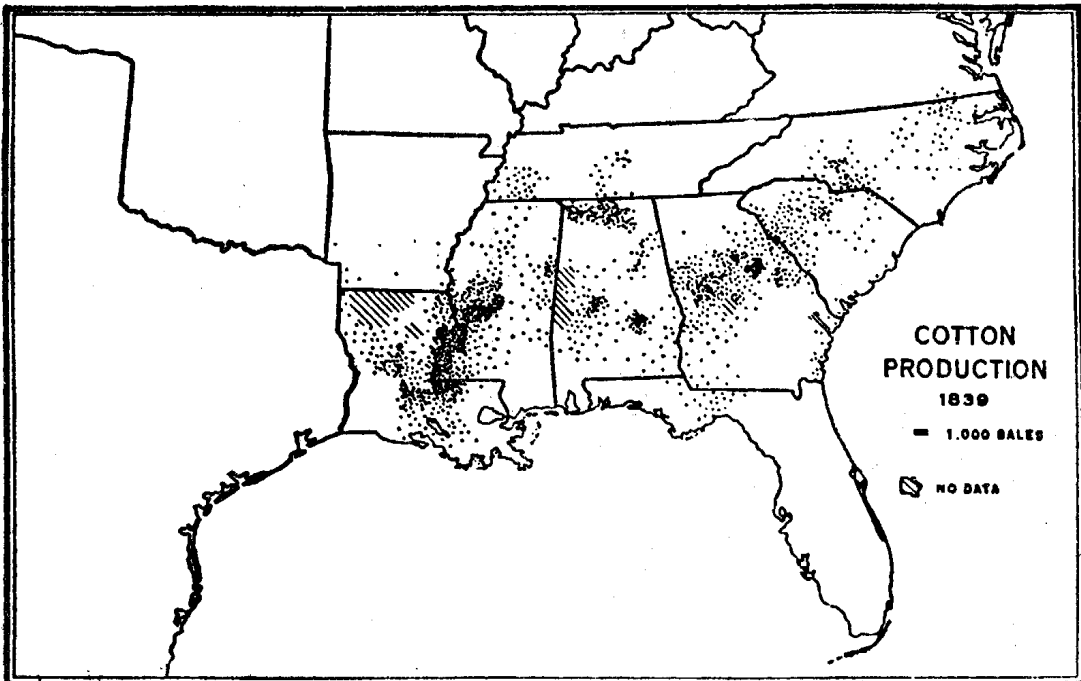


1821

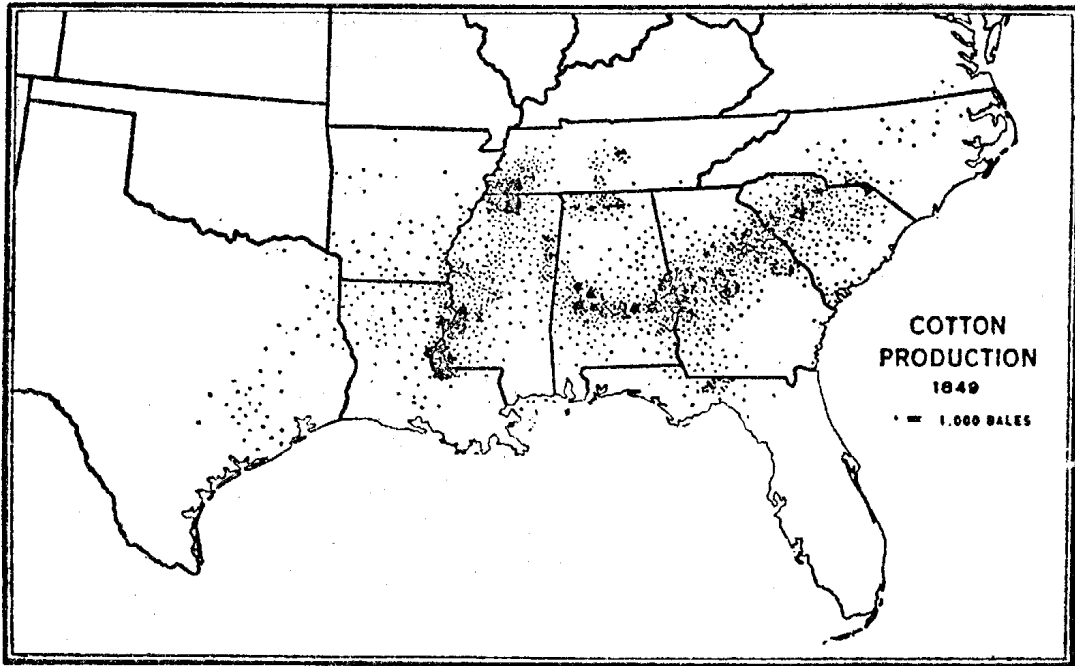
(出所) Lewis C. Gray, History of Agriculture in the Southern United States to 1860, Vol. II. p. 890.



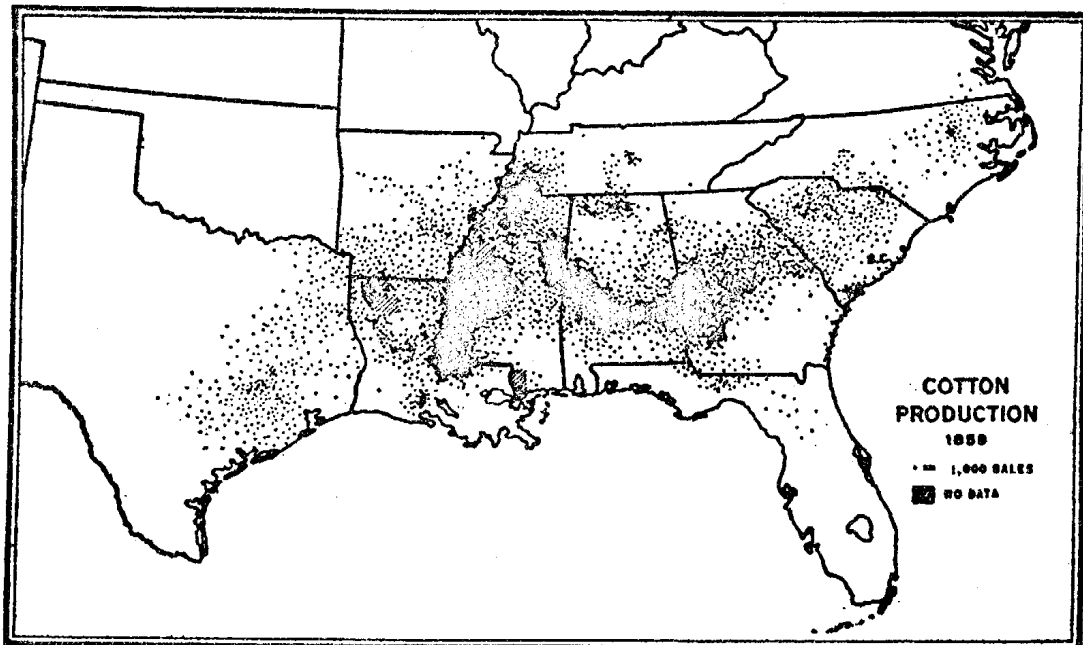
1826



1839



1849



1859

綿花生産高 500 ポンドのペール

年	生産高 bales	年	生産高 bales	年	生産高 bales
1790	3,135	1814	146,290	1838	1,091,838
1791	4,180	1815	208,986	1839	1,651,995
1792	6,270	1816	259,143	1840	1,346,232
1793	10,449	1817	271,682	1841	1,396,821
1794	16,719	1818	261,233	1842	2,033,354
1795	16,719	1819	349,007	1843	1,748,231
1796	20,899	1820	337,378	1844	2,076,737
1797	22,989	1821	376,176	1845	1,804,223
1798	31,348	1822	438,871	1846	1,602,087
1799	41,797	1823	386,625	1847	2,126,208
1800	73,145	1824	449,321	1848	2,612,299
1801	100,313	1825	532,915	1849	2,064,028
1802	114,943	1826	731,452	1850	2,133,851
1803	125,392	1827	564,263	1851	2,796,365
1804	135,841	1828	679,206	1852	3,127,067
1805	146,290	1829	762,800	1853	2,763,304
1806	167,189	1830	731,452	1854	2,705,252
1807	167,189	1831	804,598	1855	3,217,417
1808	156,740	1832	815,047	1856	2,870,678
1809	171,396	1833	929,990	1857	3,008,869
1810	177,638	1834	961,338	1858	3,754,346
1811	167,186	1835	1,060,711	1859	4,541,285
1812	156,740	1836	1,127,836	1860	3,837,402
1813	156,740	1837	1,426,891	1861	4,485,894

(出所) : L. C. Cray, History of Agriculture in the Southern United States to 1860, Vol. II, p. 1026.

煙草の栽培にかわる単一作物としての棉花の栽培は急激にのびを示しはじめ、右の図と表にあるように一八〇〇年代になるや急に、プランテーション奴隸制と結びついて一般にいわゆる深南部一帯（棉花地帯を中心）にブラック、ベルトを形成してしまつたのである。また、棉花生産量において、次の表にあるように棉花輸出金額の全輸出額に対

綿花輸出額と総輸出額

	綿花輸出額	総輸出額	綿花の割合
	ドル	ドル	%
1800	5,000,000	70,971,780	7.05
1810	15,108,000	66,757,970	22.63
1820	22,308,667	69,691,669	32.01
1830	29,674,883	71,670,735	41.40
1840	63,870,307	123,668,932	51.65
1850	71,984,116	144,375,726	49.86
1860	191,806,555	333,576,057	<u>57.50</u>

(出所)：本田創造「アメリカ南部奴隷制社会の経済構造」P.18

する比率も南北戦争直前には、綿花輸出面額は総輸出額の約五七パーセントをしめていたので、南部は棉花王国としての繁栄ぶりをはっきり示していたのである。

三

一八六〇年には、棉花は南部の王者となっていたのである。南部では作物の成長期はながくて、秋には乾燥するので、棉花栽培には最適な土地だったのである。

私はつい先日チャールストンの波止場通りを散歩して、そこに棉花が山のようにつまれていて、それらの店にも船にも、河舟や運河用の小舟にも、棉花がいっぱいつみこまれ、その重みでうめいているのを見てから、プランタース・ホテルにひきかえして四つの日刊新聞を読み、その寄泊者の会話を耳にしたが、ここでもそれらが棉！棉！棉にみちみちているのを知った。……ここからさらに旅をつづけたが、棉花畑と繰綿機と棉

花用の大型馬車以外にはほとんど何ものにもお目にかからなかった。……オーガスタに着いて、ブロード・ストリートで棉花用の大型馬車を見た時、私はすっかりあきらめてしまったほどであった。これでお仕舞いではなかった。河の上には一ダース以上のひき船がもやっていたが、いずれ千梱以上の棉花を積み、幾そうかの河舟などはもっとたく

黒人人口の推定	
年	黒人人口
1630	60
1640	597
1650	1,600
1660	2,920
1670	4,535
1680	6,971
1690	16,729
1700	27,817
1710	44,866
1720	44,839
1730	91,021
1740	150,024
1750	236,420
1760	325,806
1770	459,822
1780	575,420

(出所)
 U. S. Bureau of the Census,
*Historical Statistics of the
 United States, Colonial
 Times to 1957.* p. 756

さん積んでいた。……そして、ハンブルグ（黒人）は、町の大きさからすればずっと悪かった。なぜなら、私はこの町では、棉花の山々と家々とどちらが大きいかを言いあてるのにまごついたからだ。さて、私はオーガスタをあとにしたが、北カロライナや南カロライナやジョージアからやってきたプランターの一団がニグロの大部隊をひきつけてアラバマやミシシッピやルイジアナに向うのに追いついたとこの手紙の筆者は話をつづけている。アラバマとミシシッピとルイジアナとアーカンソーを旅行し、七〇日の間昼となく夜となくいたるところで、棉を目にし、棉を耳にしたとのことである。⁽¹⁾

この棉花栽培の労働力として南部のプランターたちは、ニグロ（黒人）の労働に目をつけはじめたのである。一六九〇年代までは、南部ではニグロの奴隷よりも、白人の年期契約奉公人 *indentured servant* の方が多かったのである。南カロライナでは、多くのプランターたちは海岸沿いの沼地で米の栽培をしていた。白人の監督や親方に駆使されるニグロの一団は米をつくる畑での年がら年中変化のない仕事にニグロが一番適していると判断されていた。そこですますニグロが輸入されるようになった。⁽²⁾

この表にあるように年を増すごとに、白人の年期契約奉公人よりも、黒人奴隸の方が多くなっていた。

黒人奴隸の労働の生活はといえば、奴隸はみんな夜明けまでにおきる。八、九才以上の働くことのできる者はみんなそれぞれの部門の畑仕事にでかける。彼らは、朝食にも夕食にも帰らないで、炊事を担当するニグロがとくに彼らのために畑で煮たきした食事をとる。彼らは、このようにして暗くなるまで仕事をつづけてやっと家に帰ってくる。土曜日の午後も休みはないし、クリスマスの前後の一、二日のほかは一年中休日はない。日曜日のほかは毎日明け方から日暮まで仕事をする。彼らに支給される一週間分の食物は、トローモロコシ一ペック⁽³⁾ないし二ガロンであるが、働く少年や少女にはこの半分、幼年にはこの四分の一であった。彼らは仕事の時間がすんだあとで、こうして支給されたトローモロコシを、自分でひかねばならない。それからトローモロコシをゆでておかゆにするが、これをいっしょに、パンも米も魚も肉もジャガイモもバターも何もたべない。ただ生きてゆけただけである。着物についていえば、成年男子や少年たちは、一年に一枚あらい毛のジャケットとズボンを着るが、シャツその他の着物は何も着ない。夏ものは、同じく一組のきわめてあらい綿布でできたジャケットとズボンであった。黒人奴隸なるがために、読み書きを教えることも、許されていなかった。⁽⁴⁾

一方、黒人奴隸の監督がプランテーションの管理をし、彼の賃金はその生産する棉花の生産量によってきまるところでは、その仕事はひどく激しさを増していた。プランターは二つの大きな階級に分けられていた。つまり、仕事に直接たずさわる者とそうでない者である。それに応じて監督にも二つの階級がつくられた。自分自身の事業を営まないプランターは、もちろんいっさいを部下の監督の手にまかした。このようなプランターは、ふつう監督の成績を、彼がつくった棉花の袋の数に正確に比例して評価するので、監督はひたすらたくさんの収穫をあげることしか考えないようになった。彼にとっては、老人の奴隸が消耗し、若い黒人奴隸が過労の結果たおれても、妊婦の奴隸が流

産し、乳児の母がその子供をなくしても、ロバが死んでも、プランテーションがこわれても、家畜が無視されても、土地がくずれても、そんなことは問題ではなかった。要するに、必要なだけの数にのぼる棉花の袋を手に入れるために、いっさいが見すごされるのである。そこで彼は以前よりも高い俸給で雇われ、彼の評判はたかまるのであった。⁽⁵⁾なにしろただ綿花生産に全力投球していたのである。

土地を集約的に耕作することができないところでは、たくさんの黒人奴隷を所有するのに随分費用がかさんでいた。そこへ国会は一八〇八年以後奴隷の輸入を禁止する法律を發布した。同時に、南西部の新しい棉作地から、もっと多くの奴隷をよこせという叫びがおこっていた。その結果奴隷の価格はおそろしくはね上った。一七九三年操棉機が発明されたころの上等の農業労働者の平均価格は、二二〇〇ドルであったものが一八一五年には二五〇ドル、一八三六年には六〇〇ドル、そして一八五〇年には、一〇〇〇ドルになっていた。それがために、ヴァージニアやメリーランドなどでは棉花を栽培するよりも、黒人奴隷の価格がはねあがっていたので、黒人をふやすために育てるほどで、商品作物を栽培するため黒人奴隷を所有することが少なくなって、時には黒人奴隷をふやすために商品作物を栽培していたところがでてきた。⁽⁶⁾メリーランドやヴァージニアや北カロライナやケンタッキーやテネシーやミズウリーの各州では、黒人奴隷の飼育については馬やロバのそれについてと同じ注意がはらわれていた。もっと南の方では、自家用と販売用の二つの目的で黒人奴隷を飼育していたといわれていたほどであった、プランターたちは、黒人奴隷の娘や婦人に命令して子供をうませた。なかには子供をうまなかつたために売りとばされてしまったたくさんの奴隷もいた。子供をうむ黒人女の値段は子供をうまない女の値段よりも六分の一ないし四分の一がたかかった。⁽⁷⁾このようにして財産をふやしたプランターもいた。

プランターが金持ちであることを一番はつきり証明するものは、彼が所有している黒人奴隷の数であるといわれて

いた。ひきあうだけの収入をもたらす一番望ましい財産は黒人奴隷なのであった。プランターの子供にのこす最良の財産——プランターが手ばなすのを一番いやがる財産——は黒人奴隷であった。そこで、プランターたちは、あまった収入は黒人奴隷に投資していた⁽⁸⁾。プランターの貧乏であるか金持ちであるかはその所有する黒人奴隷の数によってきまるほどになっていた。

注 (1) Ulrich B., *Plantation and Frontier*, Vol. I, p. 283.

(2) 平出宣道「アメリカ南部植民地における米作プランテーションの考察」明治学院大学経済論集第3号P 36

(3) 約9リットル

(4) Backingham, J. S., *The Slave States of America*, Vol. I, p. 132.

(5) Olmsted, F. L., *A Journey in the Black Country*, p. 60.

(6) Hammond, M. B., *The Cotton Industry*, p. 54.

(7) Olmsted, F. L., *A Journey in Seaboard Slave States*, p. 55.

(8) Bancroft, Frederic, *Slave Trading in the old South*, p. 344.

四

アメリカ合衆国で最初のセンサスがおこなわれた一七九〇年には、総人口三九三万九二四人の一七パーセントにあたる七五万七二〇八人が黒人であった。このうち黒人奴隷が六九万七六八一人であって、自由な身分の黒人は五万九五二七人であった⁽¹⁾。

次の表にあるように、一七九〇年には七〇万人にちかい黒人の奴隷が南部に住んでいたのである。なかでも。ヴァージニアが二九万二六二七人でずばぬけて多く、ついでメリーランドの一〇万三〇三六人、サウス・カロライナの一

1790 年の奴隷

ニューハンプシャー	157
ロードアイランド	958
コネティカット	2,648
ニューヨーク	21,193
ニュージャージー	11,423
ペンシルバニア	3,707
デラウエア	8,887
メリーランド	103,036
ヴァージニア	292,622
ノース・カロライナ	100,783
サウス・カロライナ	107,094
ジョージア	29,264
ケンタッキー	12,430
テネシー	3,417
計	697,624

(出所) T. S. Bureau of the Census, *A Century of Population Growth*, 179~1900 p. 132.

○万七八三人とほぼ同数である。この四つの州で、アメリカの黒人奴隷を独占していたほどである。

一七世紀末までは、植民地での労働力の大部分は白人の奉公人でまかなわれていたのである。⁽²⁾一六八〇年までは、ヴァージニアとメリーランドの不自由な労働人口のほとんどは、白人奉公人によつてしめられていた。⁽³⁾十七世紀には黒人奴隷制度は白人奉公人制度ほど重要ではなくて、黒人の身分もはじめのうちは白人奉公人にていて、その区別もはつきりしないほどであった。⁽⁴⁾

十七世紀も後半、ヴァージニアやメリーランドで煙草の生産が急激に発展し、十八世紀にはいるや、サウス・カロライナで米の栽培がはじまってきた。そこでは、従来の白人奉公人はプランターにとつて、労働力の提供者として適さないと考えられるようになってきた。というのは、白人奉公人の一定の年期があげると、自由になり独立して他に

去って行くような労働力をいつも確保していることは、生産規模が拡大すればするほど、プランターにとってそれは困難なことであった。そこに、白人奉公人のなかには、プランターに抗議して生活条件を改善する要求がされて、契約期間中にも抵抗したのもいた。そしてその形は、黒人奴隸の場合と同様に逃亡であった。一六七六年のヴァージニアで起ったベイコンの反乱 Bacon's Rebellion は自由を求めていた白人奉公人に大きな衝撃を与えた。このことがあってからというものの、プランターたちは白人奉公人たちを危険と思い、より安全と考えられる黒人奴隸をその労働力とする傾向になった。⁽⁵⁾そして、ついに白人奉公人にかわるべき、より安定性のある労働力をより安い費用でたくさん確保するために、黒人奴隸にたよるようになってきたのである。⁽⁶⁾

- 注 (1) U. S. Bureau of the Census, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1957*, p. 9.
(2) Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, Vol. I. p. 348.
(3) Curtis P. Nettles, *The Root of American Civilization, a History of American Colonial Life*, p. 320.
(4) Herbert Aptheker, *The Colonial Era* p. 39.
(5) 菊地謙一「アメリカ黒人奴隸制度と南北戦争」P. 11
(6) Nettles, op. cit. p. 336.

五

十七世紀から十八世紀にかけて、アメリカ植民地のプランテーションは、主になる労働力を白人奉公人からアフリカからつれてこられた黒人へとときりかえた時でもあった。はじめのころ、自由人一人に白人奉公人六人と南部でも高率をしめていたメリーランドでも、一六五八年には一〇〇〇人以上の白人奉公人を輸入していたのに、一六九六年には六二五人、一六九七年には三五三人、一六九八年には七〇三人と数を減じ、一七〇八年には白人奉公人は三〇〇三

人がいたにすぎなかった。(1) こうして、独立革命のころになると、アメリカ植民地に輸入される白人奉公人はほとんどいなくなってしまうのである。これとは反対に、黒人の身分は、はつきり奴隷として、その所有者の財産としての動産 Chattel として法律的に認められるようになってしまった。

一六六一年にヴァージニアの議会は、黒人を終身奴隷として、白人奉公人とは違った身分にするという法律を通過

させた。上の表にあるように各州に多少の差はあるが、

大体同様の趣旨の法律がそれぞれ採用されていたのである。(2) はじめて、ここに奴隷制度が突如として、できあがったというのではなくて程度の差はあっても、それ以前にすでに既成事実として存在し、慣行されていたものを、法律によって再確認し、さらにそれを発展させるためは制度化し、固定したものとなっていた。(3)

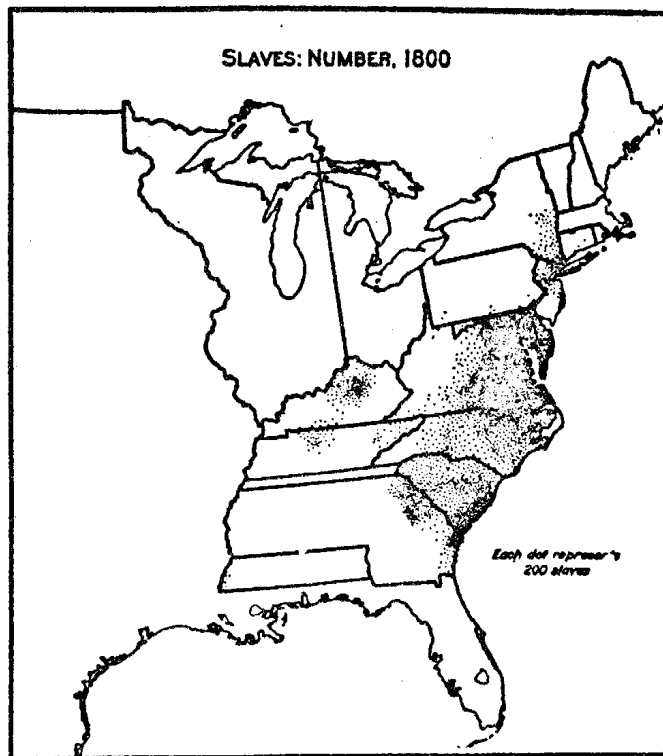
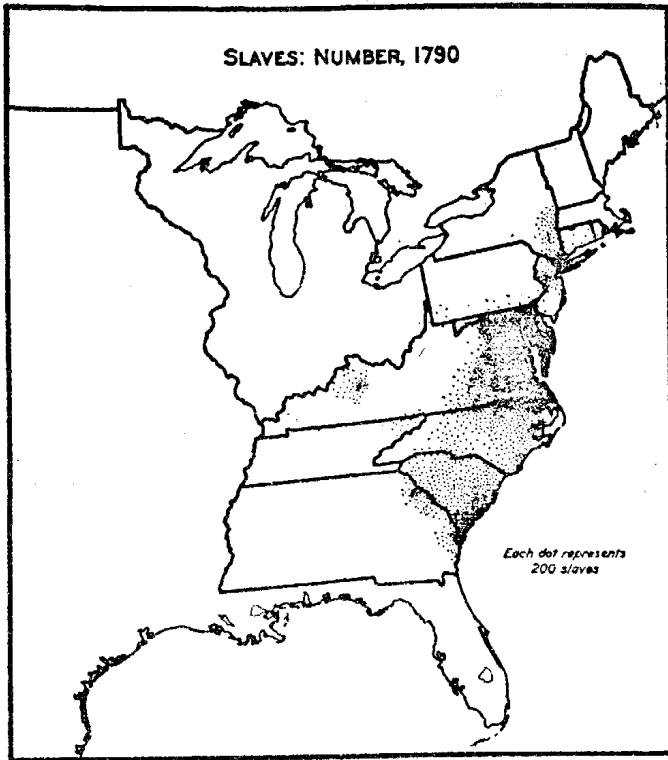
このようにして、アメリカ植民地全土にわたって黒人奴隷制度が法制化され、次にある図のように黒人奴隷の

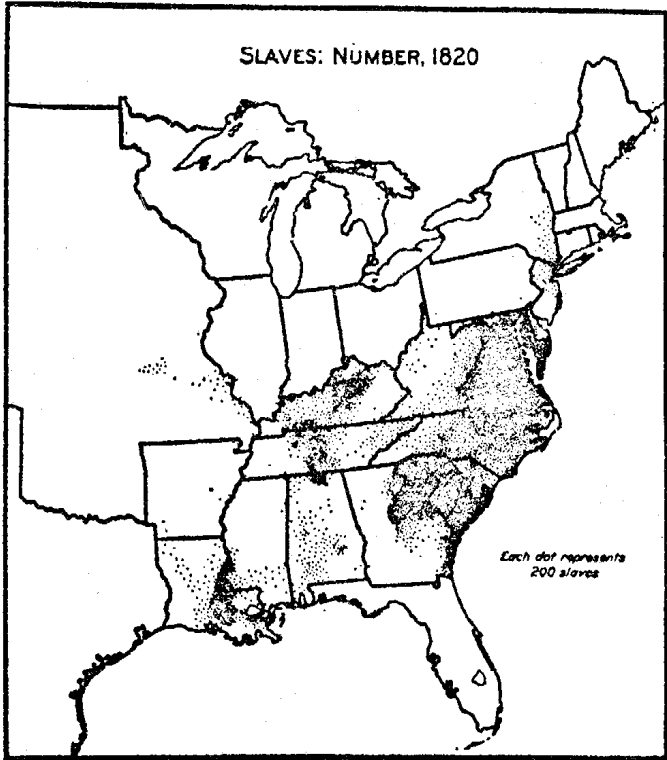
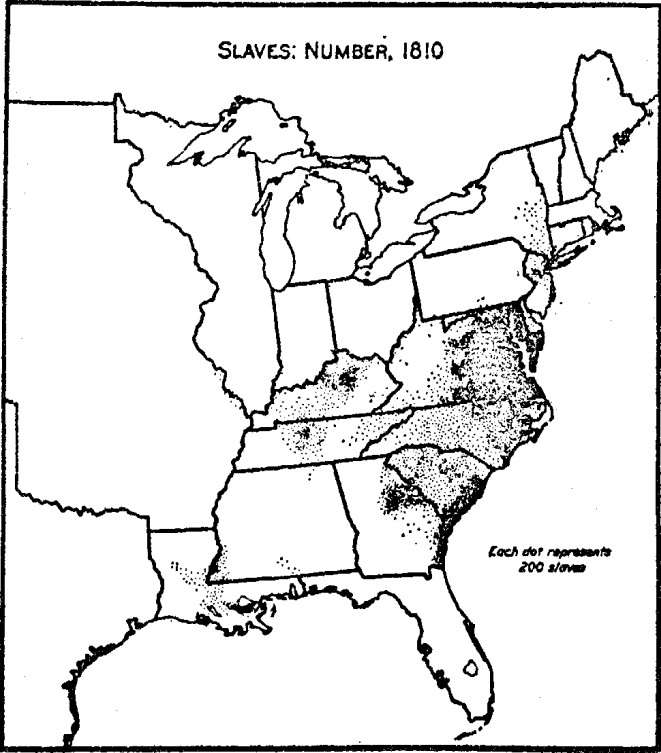
アメリカ奴隷制度合法化の年代

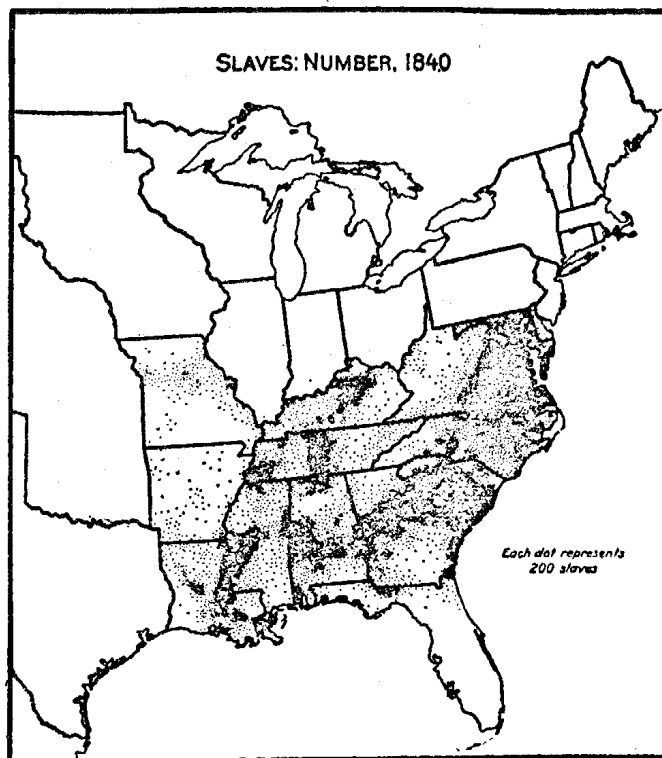
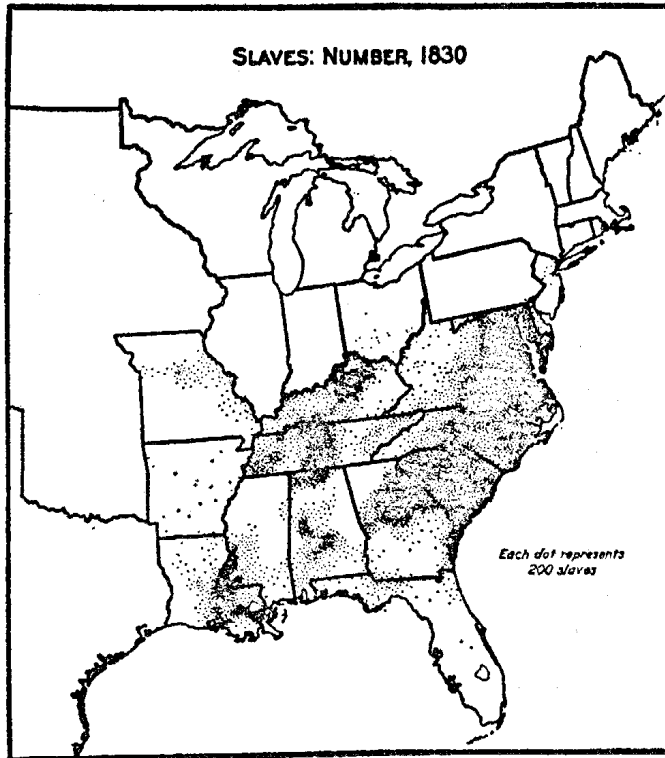
ニューハンプシャー	1714年
マサチューセッツ	1641年
ロードアイランド	1650年
ニューヨーク	1665年
デラウェア	1721年
ヴァージニア	1661年
ノースカロライナ	1715年
サウスカロライナ	1682年
ジョージア	1749年

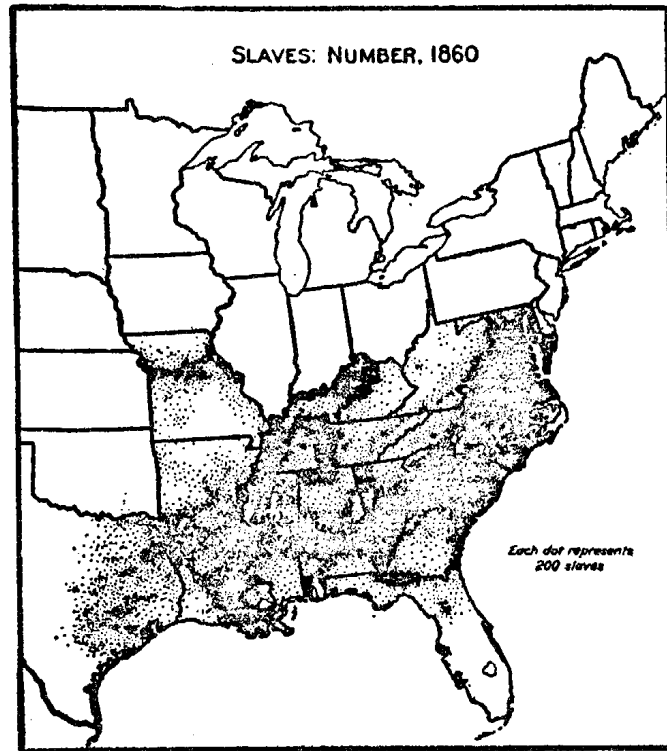
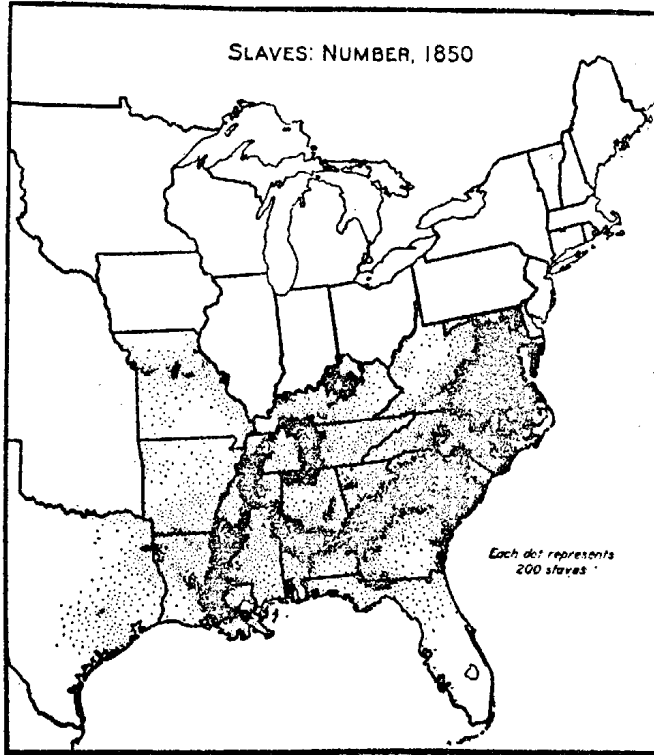
(出所) 猿谷要「アメリカンニグロの史」p. 15

人口は急激に増加の一途をたどり、南部一帯に広がってしまったのである。









(出所) Lewis C. Grey, History of Agriculture in the Southern United States to 1860, Vol. II. p. 651.

- 注 (1) Lewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, Vol. I, p. 349.
- (2) 猿谷要「アメリカン Negro の歴史」P. 15
- (3) 本田創造「アメリカ南部奴隷制社会の経済構造」P. 103

アメリカ南部の棉花王国をはぐくむものは肥沃で広大なほどのプランテーションと鞭に追われて額に汗をする黒人奴隷の群とにはかならなかつたのである。その後のことは次の機会にゆずりたい。

△昭和四十四年十二月▽